

# 韋提希の「得無生忍」

——『観経』における生死観——

田代俊孝

(同朋大学)

## はじめに

アメリカのサンフランシスコにある仏教ホスピス「カミングホームホスピス」のダイニング・プロジェクトでは、ハーバード大学の心理学者ティモシー・リアリーの提唱で英訳の仏教経典を末期患者と共に読んで、死を受け容れる学びをしている。ここでテキストとして用いられている経典は、NHKの放送で注目をあびたバウド・トドル(『チベットの死者の書』)<sup>(1)</sup>のほか、『涅槃経』などの大乘経典である。特に、龍樹の『中論』の思想を、生死を超える教えの基本としていた。<sup>(1)</sup>

かつて、筆者がそこへリサーチに行ったとき、<sup>(2)</sup>筆者はそのテキストとして『観無量寿経』を勧めた。ただし、それは、善導、そして親鸞の理解による読み方に基づくものであると。単なる、阿弥陀仏のメディテーション、つまり観察によるものではなく、自力から他力に帰するための『無量寿仏観経』といわれる読み方によるものである。<sup>(3)</sup>本論ではこのような視点から『観経』を見てみたい。

## 一 『観経』の二つの読み方

『観経』は、通常の経文にしたがった読み方、つまり、中国の善導以前の諸師(古藏・淨影)によれば、定散二善つまり観察、メディテーションを主題として説く教典であった。したがって、あの王舎城の悲劇も釈尊が定散二善を説く発端としての単なる序説であるとの見方に立ち、その登場人物すべてを菩薩の化身(「大権の聖者」)であると見た。すなわち、釈尊が十六の観法を説く御縁づくりの芝居であると見、あの観法こそが生死を超える悟りをうる行であると見た。そして、最後に説かれる念仏は、下品下生の行者が補足的に行う行と理解した。

それに対して善導は、経文の主體的な理解により、「古今楷定」の妙釈をした。すなわち、経文の「汝はこれ凡夫なり」(「序分」)の言にしたがい、韋提希を「心想羸劣」(同)の実業の凡夫として見、経典そのものが、生死の苦をどう超え、共にどう救われていくかを説いた経典であると見た。したがって、上来、説かれる定散二善は、その行じがたさと、及びがたき我が身という自覚によって「ただ念仏」を知らせんがための方便と見た。それゆえ、流通分に説かれる「汝好くこの語を持って。この語を持ってというは、すなわち、無量寿仏の名を持ってとなり。」(流通分)を結論と見、『観経』そのものを一転して、念仏の経典とみたのである。

そして、親鸞は『教行信証』で、「顕彰隱密」の義を立て、前者を顕説、後者を隱顯とし、自力から他力に帰する経典と見た。それゆえ、この『観無量寿経』を『無量寿仏観経』、つまり、無量寿仏が衆生を觀そなわす経典と名づけている。それは、どこまでも、善導の解釈に基づくものである。したがって、『観経』を、自力無効を知って、他力本願に帰することによって生死を超えろということの説いた経典として見ているのである。このような見方に立つ

て、末期患者あるいは我々がいかに生死を超えていくかを韋提希の上にオーバーラップさせて考えてみたい。

『観経』は王舎城の悲劇、とりわけ韋提希をとおして人間のもつ根源的な課題に応える經典である。それゆえ、先学は、機の実を顯わす經典として見てきた。この經典では悲劇の主人公、韋提希夫人は深宮において、

「唯、願わくば世尊、我がために広く憂悩なき処を説きたまえ」

（『真聖全』一―五〇）

と、哀願し、その結果、「廓然として大きに悟りて無生忍を得」たと記されている。また、善導によれば、韋提希夫人は第七華座觀で空中住立の阿弥陀仏を拝して、仏願に出遇ったとし、弥陀の弘願そのものを「除苦惱法」とする。

ところで、従来この經典は、母が子を「惡子」と呼び、子が母を「我が母はこれ賊なり」と謗るゆえ、そのことから人間關係を学ぶ經典であるという見方もあった。もちろん、そのような見方もあるが、究極的には、仏教とは、生死を解脱するものであり、『観経』とて例外ではない。人間の根源的苦悩である生死の苦をいかに超えるかという「生死出離の道」を説くものである。

## 二 生死出離の經

さて、阿闍世によって頻婆娑羅王は牢獄に繋がれ、そして、他日殺された。韋提希も今まさに殺されんとしている。親子の人間關係どころか共に死に直面していたのである。善導が言うごとく、文字どおり「生死出離の道」を求めているのである。

思えば、『正信偈』に「三藏流支授淨教 焚燒仙經歸樂邦」と示される。これは『統高僧伝』等によるものであるが、この「淨教」とは『観経』とされる。曇鸞は『観経』に真の「長生不死の法」を学んだのである。されば、曇鸞

もまた、『観経』をそのような視座で学んでいたのである。

ところで、「禁父縁」の所説の中で、牢獄に繋がれた頻婆娑羅王は、目連から八戒を授かり、富楼那から説法を聞くことを得るがゆえに顔色和悦であった。死を前にした王は安らかであった。しかし、王は食を絶たれ、他日死す。

一方、「厭苦縁」の所説で、韋提希夫人は、牢獄に幽閉され、

「悲泣雨涙して、はるかに仏に向かいて礼したてまつる。未だ頭を挙げざる頃に、そのとき世尊、耆闍崛山にましまして、韋提希の心の所念をしろしめして、すなわち大目犍連および阿難に勅して、空よりしてきたらしめたまう。仏、耆闍崛山より王宮に没して出でたまう。時に、韋提希、礼し已りて頭を挙げて世尊釈迦牟尼仏を見たまつる。(略)時に韋提希、仏世尊を見たまつりて、自ら璎珞を絶ち、身を挙げて地に投ぐ。号泣して、仏に向かいて、申して言さく。「世尊、我、宿何の罪ありてか、この惡子を生ずる。世尊また何等の因縁ましましてか、提婆達多と共に眷属たる。」

(『真聖全』一―四九)

と、見仏し、さらに、死に直面して憔悴したあと怒りを露にする。夫の王を殺され、今、自身も死に直面している。死をいかに受け容れるかである。

それにいたるには、E・キューブラ・ロス博士のいう死に対する「否認」「怒り」「取引」「抑鬱」「受容」といった種々の段階すら読み取れる。<sup>(4)</sup>

厭苦とは、死の否認であり、「惡子」と罵る激しい怒りがある。また、文面から取引と思われる場面もあり、「愁憂憔悴」の抑鬱状態である。E・キューブラ・ロス博士の死への五段階説を『観経』が裏付けるとは言わないまでも、明らかに韋提希は心理的にも死に直面していることはいうまでもない。

そして、「欣浄縁」において韋提希夫人は、

「唯、願わくば世尊、我がために広く憂悩なき処を説きたまえ。我当に往生すべし」  
（『真聖全』一一五〇）

と、極楽世界の阿弥陀仏のところに往生することを願う。つまり、生死の超越を願うのである。ついで、「散善顕行縁」で、世尊は韋提希に、

「汝、今知れりやいなや、阿弥陀仏、ここを去りたまうこと遠からず」  
（同右）

絶対無限との出会いによる生死の超越を説き、釈尊は自己を超えたものの、つまり、絶対無限の阿弥陀をいかにして韋提希にわからせるかに心を砕かれた。すなわち、有限の凡夫であることの自覚を促すとともに、「如来の異の方便」をもってするのである。

かくして、韋提希は「得益分」にて、

「廓然として大きに悟りて無生忍を得」  
（『真聖全』一一六五）

と、記されるように生死を出離したのである。すなわち、浄土＝無生の宝国（『観念法門』）へ往生したのである。『観経』は明らかに生死を超えていくことを説いた經典である。無生忍を得るための經典である。

### 三 無 生 忍

ところで、「無生忍」とは、単に「さとり」とされるが本来的には、いかなる意味であらうか。『宝積経』二十六に「無生忍とは、一切諸法の無生無滅を忍ずるが故なり。」  
（『大正蔵』一一一四六）

と説かれる。

また、『智度論』五十には、

「無生法忍とは、無生滅の諸法実相中において信受通達無礙不退なり。これを無生忍と名づく」

(『大正藏』二五—四一七)

といい、『同』七十三に

「此の無生忍を得るとは諸の業行をなさずおこさず、是得無生法忍と名づく。得無生法忍の菩薩は是れ阿鞞跋致と名づくなり。」

(『大正藏』二五—五七四)

と、示されるように、それは諸法の不生不滅の理を感じて、これを諦忍し、不退転地に住するものである。

しかるに、それは『大乘義章』十二に

「龍樹の説のごとく、初地已上亦無生を得。もし、仁王經および地経によらば無生は、七八九地にあり。」

(『大正藏』四四—七〇二)

と示されるごとく、初地以上の菩薩、あるいは、七、八、九地の得べき悟とされるのである。言うまでも無く、無生滅法忍、無生法忍の略であり、生無く、滅無き空なる真如の妙理に目覚めることである。忍は認可決定の義であり、智慧をもって悟ることである。つまり、不生不滅、すなわち一切法畢竟不生の理を諦忍し、安住することである。

無生とは、無生の生であり、生とか滅といった迷執を超えた真実報土の証ということであり、無上涅槃の世界は生滅の諸法を超えた絶対の世界であるから、無生というのである。そして、忍とは、そこへいたる事が認可決定することである。

そして、そのことを親鸞は『浄土和讃』に

## 「無生忍」

ふたいのくらゐとまうすなり。かならずほとけになるべきみとなるなり。」

（『親鸞全』二一七二）

と左訓によって釈し、「正定聚不退転」と同意義に理解している。つまり、他力の信心の利益として、現生に無生忍を得ると理解される。名号が無生法なるがゆえに、これを信じた者は自ら無生法を認可して不退転に住するのである。

また、『尊号真像銘文』には、同様に、

「勢至菩薩、のたまわく、我本因地　以念仏心　入無生忍　今於此界　撰念仏人　歸於浄土といへり。我本因地といふは、われもと因地にしてといへり。以念仏心といふは、念仏の心をもてといふ。入無生忍といふは、無生忍に在るとなり。今於此界といふは、いまこの娑婆界にしてといふ也。撰念仏人　といふは、念仏の人を撰取しといふ。歸於浄土といふは、念仏の人おさめとりて浄土に歸せしむとのたまへるなり」　（『親鸞全』三一八三）

と、「現生不退」で理解している。

もつとも、『歎異抄』においては、唯円は、

「弥陀の光明にてらされまひらすゆへに、一念發起するとき金剛の信心をたまはりぬれば、すでに定聚のくらゐにおさめしめたまひて、命終すればもろもろの煩惱惡障を転じて、無生忍をさとらしめたまふなり」

（『親鸞全』四一二七）

と、無生のさとりそのものに力点をおいている。

ともかくも、無生忍とは、無生無滅の道理に目覚めて、現生に生死を超えていくことである。凡夫である韋提希は、いかにして、無生忍を得たのであろうか。つまり、生死を超越したのであろうか。善導の理解から確かめてみたい。

#### 四 韋提希の得忍

さて、無生忍とは初地以上あるいは、七、八、九地の菩薩のさとりとされていたものが、そのままの十信位に属する凡夫の得る忍と理解されたのは、まさしく善導の發揮である。

善導は、韋提希が釈尊の正しき説法を聞いて、無生忍を悟ったという利益を得たのは『観經』の説法中いずれの時であったかをはっきりさせ、それに対する諸師の誤りを簡び分けるといふ方法を用いた。すなわち、諸師は韋提希の得忍を定散兩門の説法を聞き終わった聞經の利益と見たのに対し、善導は、第七華座觀での見仏の利益とみたのである。善導は、この經をあえて、「序分」・「正宗分」・「得益分」・「流通分」・「耆闍分」と五分した。

そして、善導が「得益分」として分科したところの第十六下輩觀に続く「この語を説きたまう時に、韋提希、五百の侍女と、仏の所説を聞きて、時に応じてすなわち極樂世界の広長の相を見たてまつる。」(『真聖全』一六五)以下の文を諸師は「正宗分」に含めて<sup>(5)</sup>いる。

また、この文の「この語を説きたまう時」を諸師は釈尊が、定善十六觀を説き終えた後と解釈し、韋提希はこれらの經説を聴き終え、その利益にて得忍したとするのである。つまり、古来より、經末の聞經得忍説と名づけられる立場である。

もともと、淨影や吉蔵にしても、上に述べたように、韋提希を菩薩の權化と見ている。それゆえ、無生忍が初地あるいは七、八、九地の菩薩の証するところであっても、韋提希が無生忍を得ることに、何ら問題はない。もともと、菩薩、聖者が定善や散善という厳しい修行を終えた後、その得益として、無生忍を得ると理解されているのである。



しかし、善導においては、すべてが「諸仏如来の異の方便」（「玄義分」）と理解される。したがって、それは成就し難きものとしてのものであり、むしろ、そのことを知らせんがためのものである。これを成就しなければ、無生忍が得られないとするならば、凡夫は永遠に救済から見放されることとなる。それゆえ、善導は韋提希の得忍を第七華座観と見たのである。いわゆる、第七見仏得忍説を立てたのである。

善導は、

「第七に韋提、仏の正説を聞きて、得益する分齊を料簡すと。問うて曰く、韋提既に忍を得たりと言へり。未審、何れの時にか忍を得る。出でて何れの文にか在るや。韋提の得忍は、出でて第七の観の初めにあり」

（『親鸞全』九一三八）

と、この後に經文を挙げて具体的に述べる。

つまり、善導の基本的な見方は、正しく韋提は序分の「欣浄縁」の光台現国によって極楽世界を拝み（見土）、さらに第七華座観において仏身を拝んで（見仏）、信眼が開けて得忍したという見方である。

すでに多くの先学が指摘するところであるが、それゆえ、「定善義」で華座観の見仏について、

「序には浄国に臨んで、歓喜して、もって自ら勝たることなし。今乃ち当に弥陀を観たてまつって、さらに、益々開けて、忍を悟る」

（『親鸞全』九一三三七）

と説く。また、「散善義」得益分の釈に、

「三に、「時に応じて、即ち極楽を見る」已下、まさしく夫人等の上の光台中において、極楽の相を見ることを明かす。四に、「仏身および二菩薩を見ることを得」より已下、正しく夫人第七観の初めにおいて、無量寿仏を観

たてまつりし時、即ち無生の益を得ることを明かす。」

(『親鸞全』九一二—三)

と述べる。

つまり、「序には淨国に臨んで」そして、「今乃ち当に弥陀を觀たてまつって」得忍したと言う。また、得益分には「時に応じて極樂世界広長の相を見る」とあるのは、韋提が序分の光台現国の時、見土したことを示した文であり、「仏身及び二菩薩を觀たてまつることを得」とあるのは、第七華座觀に見仏して得忍したと伝えた文証であるというのである。

結局、「定善義」に、

「弥陀空に在して、而して、立ちたまへるは、但使、心を廻らして、正念にして、我国に生まれむと願すれば、立ちどころに、即ち生まれんことを得るなり。」

(『親鸞全』九一—一三六)

と、説かれるように、住立空中の仏身を、仏心すなわち願心として受け取り、韋提希がこの無生法忍のさとりを得たことが、この經にとって特に重要であるがゆえに、經の最後に再説したのが「得益分」であると主張するのである。

第七華座觀での韋提希の得忍とは、定散二善、聞經得忍説の漸教の立場に対して、頓教の立場である。つまり、定散二善を修し、功徳を積んで無生忍を得るのは、次第々々に悟るところの漸教の立場である。それに対し、凡夫が即時に悟るのを頓教という。『觀經』そのものが、定散二善を主題とするいわゆる釈迦教要門から弘願念仏を主題とする弥陀教弘願の教えと読み取られている。華座觀得忍説とは、正しく凡夫が頓に本願力によって、無生法忍を得るという立場が領解されたことに他ならない。

その点について善導は、さらに「序分義」において、

「此れ阿弥陀仏の国、清浄にして、光明たちまちに眼の前に現ず。何ぞ踊躍、勝<sup>た</sup>へむ。この喜びに因<sup>よ</sup>るが故に、即ち無生の忍を得ることを明かす。または、喜忍と名づく。また、悟忍と名づく。また、信忍と名づく。」

（『親鸞全』九一—一〇〇）

と、無生忍に喜・悟・信の三名を出して、その内容を示し、そして、

「此れは、多く是十信の中の忍なり。解行已上の忍には非ず」

（『親鸞全』九一—一〇二）

と釈した。つまり、無生忍を解（十住）行（十行）已上で得るものではなく、仏道の初門である十信位の輕毛の凡夫が獲る真実の信心と見たのである。

もとより、これは、香月院等の指示によれば、『安樂集』の所説によっている。すなわち、そこには、

「当今の凡夫は、現に信相輕毛と名づく。亦仮名と曰へり。亦、不定聚と名づく。また、外の凡夫と名づく。未だ火宅を出でず。何をもって知ることをえん。『菩薩瓔珞經』によつて、具さに入道行位を弁ずるなり」

（『真聖全』一一—四二二）

と、示される。ここでは、『菩薩瓔珞經』下（『大正藏』二四—一〇一七）に愚縛の凡夫が大乘の法によつて一念信を起せば、それを信相の菩薩、仮名の菩薩と名付けているので、それによつて同様に述べる。つまり、末法ではたとえ凡夫であっても大乘を学ぶ限り、十信位に属す。しかし、それは真実の菩薩ではないから仮名の菩薩と名づけるという。この立場に基づいて、善導が今の所説を出したと言われている。

結局、無生忍とは、本来、初地もしくは、七、八、九地の菩薩のさと<sup>(7)</sup>りであつた。しかし、今、『安樂集』等によれば、凡夫が頓に真実信心を獲れば、十信位の菩薩にいたり、仮名の菩薩になるという。仮名の菩薩なら無生忍を得

ることができる。だから、凡夫の得忍が可能であるとするのである。凡夫である韋提希が弘願の信を得て、菩薩になることによって、無生法忍を得たと見、凡夫得忍を論理的に説明したのである。すなわち、善導は、凡夫の立場でも得忍が可能であることを示し、しかも、喜忍・悟忍・信忍の三名でその内容を示し、凡夫の得やすい名号の信心と解釈されたのである。

それは、後に親鸞が他力の信心を獲れば、弥勒と同じとか、諸仏に等しいという論理を展開させるが、それを彷彿とさせるものである。

## む す び

以上、『観経』を「得無生忍」、すなわち生死の苦悩を除く法として見てきた。韋提希の課題は、生死の苦をいかに超えるかであり、いかに得忍するかであった。そして、善導は凡夫の得忍を明示した。その流れの中で親鸞は、無生忍とは、念仏によって正定聚不退転に住することと領解し、信心によって「横超断四流」、すなわち、横様よこように生老病死を超断することと示す。韋提希の救いは正に我々の凡夫救済の証そのものである。

結局、念仏による信心獲得、つまり、得無生忍こそ、生死を超えていく確かな道であることが、『観経』によって教えられていたのである。現代社会において生死の苦悩をこえてゆかんとするに、韋提希夫人こそそのよき手本である。また、ストーリー性があり、具体性のある『観経』こそ、そのよきテキストでもある。

註

- (1) 河邑徳成著『チベット死者の書——仏典に秘められた死と転生——』（一九九三、日本放送出版協会）参照
- (2) 田代俊孝著『仏教とビハール運動』（一九九九、法蔵館）二二二頁参照
- (3) 『教行信証』『化巻』、『定本親鸞聖人全集』一―二六八頁、二六九頁等
- (4) E・キューブラ・ロス著、川口正吉訳『死ぬ瞬間』（一九七一、読売新聞社）六五頁
- (5) 浄影の『観経義疏』末（『浄土宗全書』五―一九八）、嘉祥の『観経義疏』（『浄土宗全書』五―三五一）、智顗の『観経疏』（『浄土宗全書』五―五二七）参照
- (6) 香月院深励『観経四帖疏講義』（一九七五、法蔵館）三二七頁
- (7) 懷感の『群疑論』によれば、『菩薩瓔珞經』には、無生法忍は十住の位に在りと説き、『占察經』には、無生忍は住信の前の凡夫に在りと説く」と示す。また、迦才の『浄土論』上には、「一に教に縁るがゆえに無生忍を得、謂く一切凡夫十信位の人なり、大乘經論を読んで無生忍を作す。（以下略）」と記す。

